

読書の有用性についての一考察

A Study for the Instruction of Reading

村 田 文 生

(こども学科 特任教授)

はじめに

読書の重要性は万人の言葉を待つまでもない。読書率向上を求める声は年々高まってきているのだが、依然として低迷状態にある。そこで、読書の有用性を訴え、少しでも読書率向上に寄与したい。本との出会いは簡便であり、余暇活用に欠かせない。本は知識、情報の取得に有力な媒体だ。そんなことを強く訴えたい。小論はそんな思いからまとめてみることにした。その論点は、1 学力と読書 2 読書と遊び 3 季節と読書 4 人間力と読書 5 読書と生涯学習の5点に置き、今後の考察を進める先駆けとすることとした。そして、読書が有力な生涯学習の媒介となる点にもふれ、小論のまとめとすることとした。

【キーワード：読書の有用性】

1 学力と読書

子曰 学而不思則罔 思而不学則殆

これは、論語の一節である。「ものを習っているだけで、自分で思いを巡らしてみないとまとまりがつかない。思いを巡らしてばかりで、ものを習わないと疑いがでてくる。」と解釈されている^(註1)。すなわち、「習う」とは読書を意味し、「思いを巡らしたり、考える」とは、図書、資料等から得た情報や知識を活用して、深く物事を考えたり、解釈したりして試みることでないかと考えられる。いわば、今日的解釈からすれば、情報リテラシーの修得であり、クリティカル・シンキング（批判的思考）のすすめを意味するのではないかと考えられる。このように、読書することと思考は不離一体をなすと考えられる。そして、読書と思考の対の働き体験の積み重ねから、新たな知識・情報を体得し、新たな知恵の創出に結びつけたり、能動的行動、態度の形成に結びつけたりする。これらの体験こそ、新たな読書への動機づけを誘発し、生きがいのある生活づくりに役立つものとなりえよう。児童文学作家椋鳩十は、自らの著書「村々に読書の灯を」の中で、自ら提唱し、実践した「母と子の20分間読書運動」をとおして、子ども達が一つの仕事を続けられるようになった、責任感が強くなった、そして、母と子の関係がうまくいくようになった、といっている。

この指摘こそ、読書が学習の営みを意味し、思索を誘発して、能動的態度形成に結びつくといえ

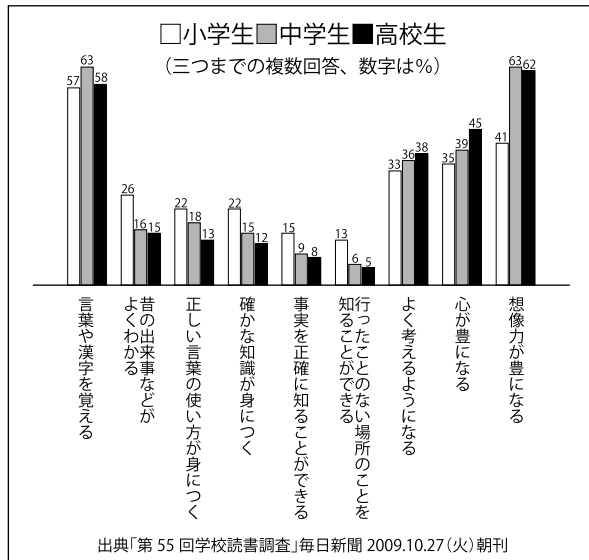
るのではなかろうか。つまり、読書は書物を読みながら思索するという学習機能へのポータルと位置づけることができよう。生活を充実させ、生きがいを高めるためには、知識を広げ、深める行為は必要であるし、それは読書、思考の働きにおいて他には考えられない。すなわち、読書は思索を伴ない、思索を行うことによって、新たな読書へと導く。読書は先人の知恵にふれることもできる。そして、それは今日の生活上に応用が可能となるし、自信もつく。このようにして、読書力の深化は、学習能力の向上に結果せしめうるのではなかろうか。

毎日新聞社が毎年行っている学校読書調査も平成21年で55回目を迎えたようであるが、本を読むことは大切だと思う子ども達は過半数を越えたようだ。この調査の対象は、小学校、中学校、高等学校の児童生徒であるが、その理由を問うと「知らない言葉や漢字を覚えることができる」、「想像力が豊かになる」をあげる子が過半数を越え、「心が豊かになる」、「よく考えるようになる」も高い数値を示している(図1-1)。

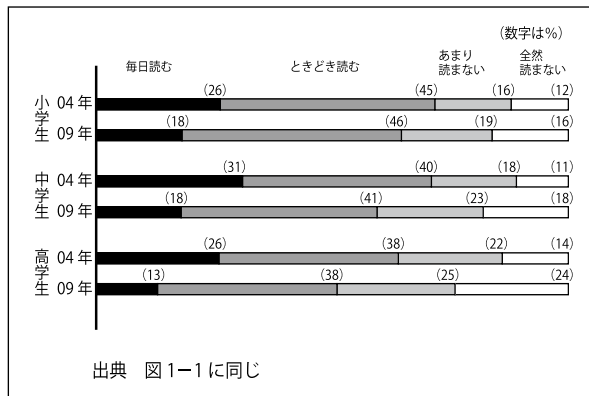
このように、子どもたちも読書の重要性は十分認識している。しかし、相変わらず読書量は少ない。同調査によれば、平成21年5月1か月に本を何冊読んだかの質問に2冊以内との答えを出した小学生は、23%だったのに対し、中学生は51%、高校生は83%という数値となっている。それは雑誌も同じで、1冊も読まない小学生、中学生、高校

生はそれぞれ、30%、32%、39%を数える。また、新聞を読む人の割合も年々減少しており、図1－2の通り小・中・高校生ともに急減している。その結果、情報の取得はテレビやインターネットに頼る結果となっているようだ（図1－3）。

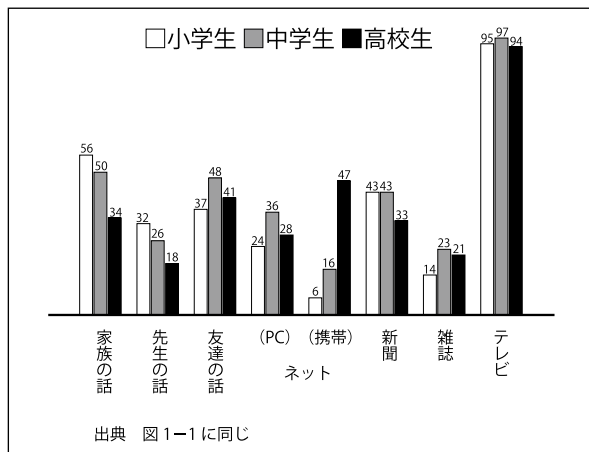
本を読むことが大切な理由（図1－1）



新聞をどれくらい読むか（図1－2）



世の中の出来事を知る情報源（図1－3）



このような結果からなのであろうか、わが国の子どもたちの読解力の低迷状態は続いている。2006年に行った経済協力開発機構（OECD）の学習到達度調査（PISA）の結果によると、「読解力」は他国に比して低下し、「言語力」も危機に瀕しているという。同調査によれば、読解力とは、自らの目標を達成し、自らの知識と可能性を発達させ、効果的に社会に参加するために書かれたテキストを理解し、利用し、熟考する能力だと定義づけている^(注2)。また、言語力は、総合的な言葉の力だともいわれ、正しい言葉の解釈と使用が求められている。

「生きるための知識と技能3」と題した2006年調査国際結果報告書（国立教育政策研究所編）によれば、読解力を測定するポイントを

1. テキストの中から1つまたは複数の情報を取り出す＜情報の取り出し＞
2. 書かれた情報から推論してテキストの意味を理解する＜テキストの解釈＞
3. 書かれた情報を自らの知識や考えや経験に関連づけてテキストを熟考し、評価する＜熟考・評価＞

の3点とし、世界各国の習熟度レベルを比較している^(注3)。なお、レベル値は、5、4、3、2、1とし、レベル値5の生徒は、「細部を理解したり、批判的に評価するなど高度な課題をやり遂げることができる」、レベル値4の生徒は、「複雑な情報を取り出したり、テキストを評価するなど難しい課題をこなすことができる」、レベル値3の生徒は、「複数の情報を結びつけたり、部分と部分の関係を明らかにするなどやや難しい読解の課題をこなすことができる」、レベル値2の生徒は、「明確な情報を理解したり、わかりやすい文章を理解するなど基本的な読解の課題をこなすことができる」、レベル値1の生徒は、「一つだけの情報を取り出したり、テキストの主要なテーマを見つけるなど簡単な課題をこなすことができる」と習熟度レベルと読解力問題との関係を記述している。その結果、レベル値3以上の生徒の割合は、わが国が59.6%であるのに対し、韓国81.6%、フィンランド79.7%とかなりの差を生んでいる^(注4)。

このようなPISAの出題に対するわが国生徒の解答状況から、日本体育大学院大学客員教授の北川達夫は、在フィンランド日本大使館勤務時に

フィンランド教育事情に高い関心を寄せ、退官後国際的言語教育のあり方を研究し、指導にあたっておられるようだが、2009年9月4日（水）付朝日新聞朝刊で、シンポジウム「いま『言語力』が危ない、読書はことばを救えるか」の基調講演で、PISAが求めている読解力を、①書かれていることを正確に理解する、②書かれていることを手掛かりに、その背景にあるものを推論し、解釈する、③書かれている内容と自分の考えを比べて評価して、自分の意見を述べるの3点について、これらの能力が年々低下していると指摘している。さらに、これらの能力は、同時に行っている数学的リテラシーや科学的リテラシーにも影響をもたらしているという。

ただ、この調査結果から、1つ気がかりな点がある。それは、読書と行動との関係について触れていない点である。子どもは、本で得た知識を自らの行動に移して体験してみても理解に結びつける場合が多いからだ。空想の世界でさえ、奇想天外な行為への試みを行う。これらの点は今後の考察にゆだねたいし、ぜひ実施したい気持である。

さて、この読解力を高めるための改善方策はどのようにしたらよいといえるのだろうか。まずは、読書の質と量の向上を挙げたい。そのためには、幼い頃から本好きに育てあげたいものである。そのための行政施策は、現在数多く取り組まれている。

まず、1995（平成7年）年8月児童生徒の読書に関する調査研究協力者会議からの報告書提出から、2001（平成13年）年12月には、「子どもの読書活動の推進に関する法律」（以下「子ども読書法」という。）の制定、施行、2005（平成17年）年7月には、「文字活字文化振興法」の施行と続き、読書や文字、活字文化の環境づくりの取り組みが進められてきている。そして、子ども読書法の指摘を受けて、都道府県では子ども読書活動推進計画の策定と実践への着手が進められてきている。

また、乳幼児期に絵本の出会いの場と機会を意図的に設けようとブックスタート運動が2002（平成14年）年頃から展開されてきている。これは、NPOブックスタート支援センターが中心となって進めているものである。ちなみに、2005（平成17年）年10月現在、630の自治体が取組んでいる。この運動のスタートは、1992年英国のバー

ミンガム市でブックトラストという団体によって始められたとされるもので、図書館と保健関係機関が協力し、最寄りの大学も加わってスタートしたという。まず、新生児家庭へ絵本と子育てに関係する資料を配布する。そして、それらの絵本は、乳児の定期健康診断の折に図書館の職員によって絵本の読みきかせの技術指導が行われ、乳児への絵本の出会いの場を意図的に提供していくというものである。しかしながら、これらの活動は、母親、父親等の見識が常に問われており、ねばり強く、子どもたちの絵本の読みきかせの要求に答えていかなければならない。また、子どもたちの成長に合わせて、絵本などの字の少ない本、楽しい本から、ためになる本、ストーリー性のある本、字の少し多い本等へと子どもたちの本との出会いを方向づけ、深める読書行為に深化していく過程を注意深く見守り、支援していった必要がある。読みを深めるため、読書の質や量の充実と本の内容に疑問符の取り入れを少しずつ増やし、読書活動を深化させるよう導いていった欲しいものである。

しかし、一方で読書活動の進化発展の時期（小学校・中学年から中学1・2年生頃）こそ本好きと本嫌いを分岐する時期と考えられる。それは、字が読めるようになったからという理由で突き放す親の行為が見られる時期でもある。それらの行為が早目に訪れる子どもたちこそ本を見放す確率が高まると考えられる。子どもは、字が読めても意味が理解できるとは限らない。親たちの豊かな経験からのフォローアップが求められる。また、面白いと思われる本との出会いの機会を多くもたせたい。それは本読みの理解度を高める重要な場でもあるからだ。絵本等をめぐる親による読み聞かせ、本をめぐる興味ある本との出会いの機会等が本好き、本嫌いを分ける。親に愛情を求めて生きる子どもたちにとって、本を媒介とする読みきかせはまたとない貴重な愛情独占の時でもあった。それが奪われる時子どもは少しずつ本から遠ざかるようになる。また、親が子どもの興味関心も無視するかのように読む本を限定してしまうなどの行為は一考を要する。

読書嫌いになるおそれのある時期を乗り越え、「本好き」を一生身につけさせることは、子どもたちの学力向上だけでなく、生きる意欲を高める機縁ともなること、ひいては読書活動が生涯学習そ

のもののとなることを念頭に子育てにあたって、読書を注意深く見守っていった欲しいものである。

2 読書と遊び

本は、ワクワク、ドキドキする、面白く、楽しいが本読みへの動機づけになると考えられている。作家である那須正幹もまた、「感情移入が可能になった時、読書にはまる。」^(注5)ともいっている。本との出会いは、絵や文字（表現）への興味関心から内容理解による面白さ、楽しさ、ワクワク・ドキドキ観、冒険心、悲しさなどを振り起させられたり、不思議の世界との出会いに一喜一憂する思いが本を虜にする。

普通、大人は読書を趣味の1つにあげる人が多い。それは、子どもの頃より読書体験に遭遇した経歴のもち主なのであろう。読書をとおして、そんな体験と出会った記憶から趣味に挙げる人が多いのではない。読書は、10分、20分、少しの余暇さえあれば可能なのである。読書は興味関心のある本に出会えば、しばしの間至福の時を過ごすことができる。

また、本は情報の宝庫でもある。ものを作ったり、文章をまとめたりする際、なくてはならないツールでもある。それは、本に限らず、雑誌、パンフレット、リーフレット、ちらしからでも得られる。研究活動や仕事の分野、生活する領域に対応して、いろいろな資料、情報を取扱っている図書館では、どんな要望にでも応じられる体制づくりを常に進めている。例えば、哲学、思想、宗教、歴史などの人文科学分野に生きる人々には古い資料から、新たな発見によって古い資料の見直し作業にお手伝いすることもできる。政治、経済、社会、教育などの社会現象を主に扱う社会科学分野に生きる人々には、古いデータから現在発行されている雑誌、電子ジャーナル、インターネットによる各種機関、施設のホームページからの情報収集まで幅広くお手伝いすることもできる。また、自然現象に興味関心を寄せたり、研究したりする自然科学の分野に生きる人々には、電子ジャーナルや雑誌等の定期刊行物から、インターネットによる情報収集、学会等研究発表会の報告書など最新情報の収集にも力を尽し、体制整備につとめている。

さらに、本は仲間との遊び、例えば読みあいの遊び、読書クイズ、子どもの「読む力」を引き出

すといわれる読書へのアニメーション^(注6)など楽しみながら読書をわがものとして体得していけるよう導くことが大切であると考えられている。

いずれにせよ、読書への導入には、公式な方法・形態があるわけではない。従って、利用する図書も多様でよいのではない。読書のきっかけが絵本、マンガでもよいのではない。その出会いも年令との適時性は考えなくてよい。何歳になろうと、そのミスマッチは考えなくてよい。いつでも、どこでも、どんな本からでも興味をもった本であれば没頭して本にのめり込むことだ。そのための条件整備は図書館、特に公共図書館ではできあがっている。読書に没入した後、成長とともに客観的読書活動を経て、一冊に収められているメッセージ、知識、情報、知恵等が採取できるようになる。すなわち、読書を目的的に行う段階から、手段として図書利用が可能になるといえる。

一方、活字と出会い、本読みの慣れは、今日急激に変貌する科学技術の所産となるハードな機械類の解説書や各種契約書に目を通す作業にも壁を感じなくなり、読破も容易になるのではない。

まずは、楽しみ、面白さを感じることから本との出会い、活字との出会いを育てあげたいものである。さらに、読書を好む人は、どんなことにも積極的で、徹底して楽しめる。人との交遊にも自然体で、行動的だ。そして明るい。これらは読書好き人間の特徴だともいわれる^(注7)。「読書と遊び」、それは「楽しみと読書」といいかえることもできよう。読書体験者、特にベテランといわれる読書家は読書こそわが人生、生きる上で最良の友（本）との生活だともいっているようだ。これ以上でも、以下でもない読書との暮らし、それが楽園の広場を広げようと読書会、読書クラブなどの活動の場が全国各地で盛んに展開されている。一冊の本に盛られている世界観を共有できる仲間同志の語らいは仲間の結びつきを強固にし、新たな世界の探索に協力して進もうとする絆をさらに深め、広げる。個の世界から仲間との共存の世界へ広がる喜びは1人1人が生きる居場所でもある。まずは、読書を楽しみから始め、日常の生活過程に根付かせていくことが肝要と考えられる。2010年は国民読書年でもある。読書普及に知恵を出しあいたいものである。

3 季節と読書

読書を考える上で、季節との関連性を重視したいものである。読書率と季節との関連性はどうか。それはこれからの研究課題として据え置くこととして、まずは読書と季節との関係性について考察を試みてみることにする。

秋は読書の季節といわれるように、読書に時間を割く人の割合は急に増える。読書をして、思索にふけるのに最も適した時期だからであろう。ものの思いにふけりながら、また新たな本にのめり込む。その連鎖は、生きがいの深化にも結びつく。本はメルヘンの世界、随想、詩歌等の領域から、哲学、宗教、歴史探訪、動・植物の生態探索、はては日常生活の実用書に至るまで図書に魅せられ、先人の知恵や思想、人間社会の進化発展の経緯にまでふれることができる。落ち着いて来し方、行く末に深く思い巡らせるのにまたとない季節といえる。

冬もまた読書を目的的に利用するよい季節といえる。夜長に没入する読書は、小宇宙が身体を包み込んでくれる。心は浮遊するかのように異世界に遊び、時間の経つのを忘れさせてくれる。そして、心の中に浮遊する世界は次から次へと移動し、没入の時間は長く持続する。静の世界は、読書とともに過ぎ行き、充実感あふれる心の世界とともに夜は更けていく。

春は、夢にまでみた地上の自然界に飛翔する季節である。時には、読書を媒介に仮想の旅世界に感動し、心は躍動する。そして、それが機縁となって現実体験の世界にチャレンジする。時には、閉ざされた心の状態に沈んでいても、陽光は新たな冒険を求めて躍動する。夢の実現に歩み出すこともできる。実行を前提にした読書の季節だともいえる。動へのきっかけづくりに読書は役立つ。換言すれば、この時期の読書は、行動を誘発する大切な機縁でもある。

夏もまた、読書は暑さを忘れさせてくれる活動の季節だ。スポーツ、冒険もの、不思議の世界、スリラー、勧善懲悪ものなどに没頭できる読書との出会いの季節ともいえる。仲間とのにぎわいにひとときが過ぎて、我にかえった時、そのような図書の世界は新たなエネルギーを蓄えてくれる夏の読物ともいえる。それは、次の季節への飛躍の礎ともなる。また、時には緑陰の中での読書活

動も身心を自然に投げ出した一体感からリフレッシュをもたらす、暑さの中での忘我的読書は余暇開発の一助ともなる。

このように、それぞれの季節と読書との関係は深く、意義深い。まさに、「生きる」は、「読書する」といっても過言ではない。「よりよく生きる」は、「よりよい読書をする」ことだといってよいのではないか。生き方には十人十色、それぞれの生き方があるように読書にも人それぞれに違ってよいのではないか。軽いものから重いもの、短編ものから長編もの、一般教養の本から実用書、専門図書等自由に選んで、都合のよい時に利用すればよい。春夏秋冬、いつでもそれぞれの人に合う本は、その利用を待っていてくれる。

4 人間力と読書

人間力、それは人が社会で生き貫いていくために必要不可欠な力、能力だといえよう。それは、自己啓発力、忍耐力、集中力、持続力、創造力などが考えられる。読書は、それらいずれも体得できる要素を秘めている。ヘルマン・ヘッセは、「書物を読んで自己を形成し、精神的に成長するためには、ただ一つの法則とただ一つの道があるのみである。それは、自分の読んでいるものに敬意をもつこと、理解しようとする忍耐力をもつこと、他者の意見を認め、それを注意深く聞くような謙虚さをもつことである。…友人の言葉を注意深く聞くように読書する人に対しては、書物は心を開き、その人のものとなる。」^(注8) このように、書物は、読書する内容によって、読書する態度によって、読書を持続する行為によって、人間力を磨く可能性を秘めている。読書への動機づけは、既述のとおり、楽しさ、面白さ、スリル等が充たされることにあったにせよ、読書を途中で放棄したり、別のものに興味を移す行為こそが問題で、いかに読書に傾倒し、持続・継続する行為が持ちこたえられるのかに留意したい。読書は人づくりへの試行の時でもあるようだ。途中でやめることは、他に何ら迷惑をかけるわけでもなく、他に損害を与えることでもない。自分で継続するか否かは自由な立場にある。だから、わからない時、苦痛を感じた時本を読むことをやめるのは自由である。ただ、小・中・高校時代に生きる若い人がそれらを頻発すること、慣行することには危惧を抱かざるをえ

ない。本を一冊読みとおせる努力が人間形成になること、成功感、成就感、達成感に結びつくことを体験させたい。本の利用方法にはいろいろあり、大部の本であってもたった一ページだけ読む場合もある。読破することは、必ずしも一ページ目からすべて読むことだけが完成とはいえない。だが、そのような応用は図書を使いなれた人にはじめて許される利用法といえよう。10代、20代の読書は、内容理解もさることながら、読書行為にも着目したいものである。そして、若い時代に読破習慣を身につけたものが読書を趣味として、生涯を通じて自らの生活の一部として形成される。その結果は、情報の取得方法も、生活上の課題解決方法も容易に身につくはずだからである。これぞ、学び方を学ぶ方法の体得となると考えられる。

また、日頃の豊かな生活を樹立していくための自己啓発力や日頃の生活改善、新たな発想を生み出す創造力もまた身につくようになると考えられる。デジタル社会の今日、バーチャルな世界を現出させては、それを仕事に、生活にいかしていこうとする発想力も読書をとおして得られると考えられる。いずれにせよ、読書は人間性の奥行きを深め、スケールを増幅させ、拡大へと導く。結果、人間力の構築に結果すると考えられる。

5 生涯学習と読書

生涯教育を提唱し、その推進に中心的役割を担っているユネスコは、1996年の報告書で「生涯学習の4つの柱」として、1 知ることを学ぶ (Learning to know) 2 実践することを学ぶ (Learning to do) 3 共に生きることを学ぶ (Learning to live together) 4 人間として生きることを学ぶ (Learning to be) を挙げている^(注9)。中でも、3、4点目を特に重視しているようだ。その精神がユネスコ憲章に合致するからであろう。ただ、この4点には「考える」、「思考する」が直接的には触れていない。しかし、知る・実践する・生きるために学ぶことのプロセスにはそれぞれ「考える」機能が存在することは自明の理といえよう。

即ち、学び、考えることは不離一体のものとは既述のとおりなのである。これを読書論に置き換えれば、読書し、思考する。思考し、読書する行為のくり返しが、学びの機能を深め、高めることに帰着する。つまり、読書は、学習行為そのもの

といえる。

生涯学習は、生きるための学習であるとされていることから、これを読書論に置き換えれば、読書は生きるための読書だといいかえることもできよう。読書する内容は多様であっても読書の方法の体得は万人が必要とすべき要点ではないか。加藤周一の「読書術」に、そのヒントは提示されている。同書の中で、加藤は、おそく読む精読術、はやく読む速読術、本を読まない読書術、外国語の本を読む解読術、新聞・雑誌を読む看破術、むずかしい本を読む読破術の6つの方法を取りあげ、対象となる図書への対処法を紹介している^(注10)。読書する書籍への対処は様でなく、選択した図書に随時、適切に対処することが求められる。これは、学習論にもその手法は大いに参考になるところである。媒体となる学習素材の活用、学習機会や場所の選定において、学習目的や課題意識が具体的に焦点化されていけば、その方法は多様に応用できる。

ところで、今日的生涯学習論は、1940年12月ユネスコ成人教育会議で、当時成人教育課長であったポール・ラングランによって提示されたワーキング・ペーパー「エデュカシオン・ペルマナント (恒久教育、永久教育)」が契機となっている。ラングランによれば、「未来はどのように変わるかわからないのだから、これからの教育は、内容ではなく、『認識の仕方』、『判断の仕方』を教えることにある。人間の可能性を引き出すという『教育』の本来の目的に立ちかえって、『一生、自分の可能性を伸ばしていけるという独裁者をつくること』が教育である。」^(注11)との指摘に思いをいたさなければならぬ。つまり、学び方を学ぶことで、一生涯の学習者であり続けることがこれからの生き方だと指摘しているのである。

学習と読書の関係については、有識者が多数、その重要性を指摘している。作家椎名誠は、「知識をかみくだいて考えを深めるには読書が一番手っ取り早いんです。大切なのはいつも思考を柔軟に、感受性を豊かにすること」^(注12)だという。また、大江健三郎は、「…読書を通じて私がやってきたことは、最初は楽しみながら、そのうち切実に熱中しての『独学』というほかなかったように思います。」^(注13)などと紹介している。

このように、読書と学習は切り離すことのでき

ない共存関係にあるのである。

人々が生涯をとおして、いつでも、どこでも、なんでも、だれでも学ぶことを奨励する社会風潮の中で、学習の成果を適切に評価する生涯学習社会の構築は静かに、日本全国に進められてきている。学ぶことの手段に読書が有力な媒介として位置づけられる以上、今はただ、読書との出会いを幼少期から奨励し、読書の好き、嫌いの分岐点となる時期をのり越えて、一生涯の読書愛好者となるよう側面から支援していきたいものである。そして、生涯を通じて学ぶことに生きがいを求める人づくりに読書活動の輪が広がることを願わざるをえないところである。

おわりに

読書論については、今後とも深く、そのあり方を検討していく必要があると考えている。一方で、読書を実際に日常生活にいかしている事例は、その重要性が指摘している割には依然として少ないように感じられる。

そこで、声高にその必要性を論ずるより実践を、との思いから始まったとされる“朝読”といわれる「朝の読書運動」が盛んである。全国小・中・高校のほとんどの学校で実践されているようだ。そして、その成果は、いろいろな教科活動により影響をもたらしている。しかし、その割合には、本文でも紹介したとおり読書率は低迷状態にある。

戦後行われた鹿児島県立図書館長だった児童文学作家椋鳩十による「母と子の20分間読書運動」や長野県立図書館長だった叫沢清介による「PTA母親文庫」などの読書運動は当該地を中心に大きな成果を収めながら展開された。今回の朝読は学校内の読書運動として全国レベルで大きく普及している。今後とも継続して展開されるとともに、家庭にも、地域でも波及し、国民運動として広がっていくようお願いしたいものだ。読書は、携帯・電子ブックでも可能となっている。その媒体は多様となるうとも、一時集中して読書にのめり込む状態は人づくりに大いに意味あることと既述した。今後、読書は心理面でも、医学療法としても注目されているだけに、その方面からの研究も必要と考えている。

＜参考文献＞

- 注1 「論語」貝塚茂樹訳注中央文庫 P44～45
- 2 「生きるための知識と技能3」OECD生徒の学習到達度調査(PISA)
2006年調査国際結果報告書 2007年国立教育政策研究所編 P172
- 3 注2同報告書 P172
- 4 注2同報告書 P177～184
- 5 「本、読もっ！」毎日新聞社 所収
- 6 「読書へのアニメーション」とは、本を1人で十分に読めない子どもを手助けして、自分一人で本を読んで理解し、深く考えて自分のものにすることが出来る力を引き出すために、スペインでモンセラ・サルトが開発した読書教育メソッド
「読書へのアニメーション入門」有元秀文著 学習研究社 P22
- 7 「元気の出る読書術」ハイブロー武蔵著 所収
- 8 「ヘッセ読書術」草思社 所収
- 9 「学習：秘められた宝」ユネスコ「21世紀教育国際委員会」報告書 天城勲監訳 P66～75
- 10 「読書術」加藤周一著 岩波書店(同時代ライブラリー139)
- 11 「生活のなかの生涯学習」村田文生他著 学文社 P31
- 12 「本、読もっ！」毎日新聞社 所収
- 13 2005.4.12(火)日付 朝日新聞 朝刊 所収